東京土建の平和憲法・社会保障対策部の共催で9月14日の夜間、憲法学習会「憲法を生かすということ」が開かれました。その中の対談から、コロナ禍の今、改めて憲法25条のいう「健康で文化的」の意味について考えます。

対談「憲法を生かすということ」

東京大学名誉教授・九条の会事務局長　小森 陽一さん　×　作家・活動家　雨宮 処凛さん

「最低限度の生活」について議論は進む

何かあれば一気に路上

コロナはきっかけに過ぎない

小森　処凛さんの著書『コロナ禍、貧困の記録』に「傷が浅いうちに支援して働ける人は労働市場に戻ってもらえばいい。そこをケチると結果的に財政を圧迫する」とあります。コロナ禍の中でのその実感について、まずはお聞きしたいのですが。

雨宮　2006年から15年間、貧困の問題をメインに取材し、その現場で活動しています。同世代には90年代のバブル崩壊後の就職氷河期にそのまま非正規になった人がたくさんいるのですが、30代までは正社員になりたい、結婚したい、子どもを持ちたいと国などに訴えていました。でも、15年間、全く無視され続けて、結局40代になった瞬間にいろんな人が諦め出します。正社員化も諦めて、このまま月収13万円ぐらいのフリーターとして過ごし、年金も満足に貰えないので65歳になれば生活保護を受けやすくなるのではという、ものすごく低い目標を設定し直していて、その意味でこの15年間は本当に残酷だなと思っています。

雨宮処凛（あまみやかりん）さん
作家・活動家／フリーターなどを経て2000年デビュー。最新刊は『コロナ禍、貧困の記録』（かもがわ出版）

ペット、携帯電話は

憲法25条が包含する文化

雨宮　この1年半は、コロナ禍の中で「新型コロナ災害緊急アクション」が立ち上がり、相談を受け付けています。昨年4月から今日に至るまでSOSメールが毎日届いていて、その内容も所持金が0円になった、派遣の仕事を切られて寮も追い出されて路上に出てしまった、1週間何も食べてないなど深刻です。

そして、そういう人たちは自分が生活保護の対象になるとは全く思ってないんですよ。病気の人とか高齢者の人が受けるものだと思っていて、自分は若いから頑張りますと。強烈な自己責任論ですよね。「日本も借金で大変なんだから」っていうことを、家もなく所持金が数円の若い人が言っているという、コロナの中でもそういう状況です。

小森　小泉政権から自民党政権がずっと言ってきた自己責任論のプレッシャーの中で、所持金が数円になるまで我慢する。その心理が、何という表現を使っていいか、深刻ですね。

雨宮　50代の方でしたけど、相談を受けた時にはもう1000円ぐらいしかなくて今夜初めて野宿になるって話だったので都が用意しているホテルを紹介して。せっかく繋がったから支援団体と生活保護の話をしましょうと話をしても「生活保護だけは受けたくない。休み明けに今までの仕事相手に電話するから大丈夫」って言うのですが、その人、携帯止まっているんですよね。携帯が止まっていると仕事してなかなかできないじゃないですか。この「携帯が止まっている問題」も大きくて、今SOSメールをくれる人の半分ぐらいは携帯が止まってしまっています。

小森　その場合、携帯が止まっていると、どういうルートでメールが来るのですか。

雨宮　コンビニとかのフリーWi-Fiを探してそこからメールしてくるので、こちらからは連絡がつかないことも。今、携帯がないとアウトですよね。まず仕事ができないし、不動産契約も難しい。

小森　改めて憲法25条の「国民は健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」という条文が、理念的にと同時に具体的にどういうことなのかが問われていますね。「最低限度の生活」を営むために携帯が不可欠なんですよね。

雨宮　生活保護でも、昔は、エアコンは贅沢だったわけですが今は購入費が支給されます。携帯もやっぱり健康で文化的な最低限度に認められて欲しいです。今、携帯は必要不可欠なものに入っておらず、生活保護を受けた人にも、それは自分で何とかしなさいということになっています。あと、文化的なってことで言うと、今、コロナで職を失って路上に出てくる人で、ペットと一緒に路上に出てくる人もいるんですね。

小森　私もその話をしたかったのですが、処凛さんの著書ではこんなふうに始まるんですよね。「その女性（仮にエリさんと呼ぶ）は膝の上に小型犬を乗せて私が来るのを待っていた。クリクリした目の可愛らしい犬だ。名前はサトちゃん（仮名）」犬まで仮名という配慮がされていて、ちょっと私は涙したのですけど「エリさんから新型コロナ災害緊急アクションにSOSのメールが入ったのは数日前。そこには犬と一緒にアパートを追い出されてしまったこと、所持金もほぼなく昨日から自分も犬も食べていないことが記されていた」。そして、エリさんとサトちゃんに関しては「役所に行ったところ『生活保護を受けるなら犬を処分しろ』と言われたのだ。もし私が猫を処分しろなんて言われたら2度と役所になんか行かないだろう。あまりにもあまりにもひどい話だ。ここで強調しておきたいが生活保護はペットがいても受けられる。処分する必要など絶対ない」と。ここに「文化的な生活」の文化というのは何をどこまで包含するものなのかという重要な問題提起があります。

小森陽一（こもりよういち）さん
東京大学名誉教授、九条の会事務局長、文学研究者（日本近代文学）、日本社会文学会代表理事

所持金 数円まで我慢

自己責任論の刷込み、強烈

立ち上げた反貧困犬猫部

雨宮　それが初めてのペットを連れて住まいを失った方の支援だったのですが、通常、家も所持金もない場合は支援者が安いビジネスホテルを予約するんですね。そのまま泊まって後日、生活保護申請をする流れになるんですが、犬がいたらホテルに泊まれないということに気づいて。たまたま近くでペットと泊まれるホテルがあったのですが、結構高いんですね。そのお金は、最初、コロナ禍で立ち上げた「緊急ささえあい基金」の寄付金から出そうかと思ったのですが、多分問題になるだろうと。やっぱりペットは贅沢だというような人もいるかもしれないので別の基金を立ち上げようと反貧困犬猫部を去年の6月に立ち上げたんです。

小森　その発想がすごいですよね。雨宮処凛的運動の作り方の思想と感性の要です。やっぱり憲法25条をどこまで読み込むのかですね。

雨宮　色々失った人がペットと路上に出るって事は、それが最後の最後の大切なものなわけです。それを公的福祉の利用と引き換えに殺せっていうのは最悪だし、役所の対応は完全に違法です。人間に裏切られまくって、だからこそペットが手放せない人からそれを奪うのは、その人の根本に関わる事だと思います。

国会の議論で現場変化

「扶養照会しません」

雨宮　命を最優先にする、だから安心して下さいというたったそれだけのメッセージが1年半に渡って一度も出されていない。やっぱりトップが言う事によって現場って本当に変わります。生活保護申請の足かせとなっている扶養照会の問題が国会で取り上げられた瞬間に現場職員の対応が突然変わって「無理に扶養照会しません」と。国会とかメディアの対応でこんなに変わるのかと思いました。

小森　国会での議論でどう質問して責任者がどう答えるのかということが、極めて即応的に現場の状況を変えていくということですね。

雨宮　役所は、総理大臣が「自助」と言えば「見捨ててもいいんだ」となります。それを逆に「絶対に一人も残さず、路上には放置しない」といえば現場は必ず変わります。

小森　憲法25から逸脱するような様々なシステムが、あのアベノミクスの中で日本に広がり、それが毎日契約を更新しなければならないような労働者に背負わされている。その人たちがホームレス化し、かつ耐えられなくて自ら命を絶っていくという連鎖に、もうこの国はコロナ禍でなっているということですね。

雨宮　コロナもきっかけに過ぎません。これは経済危機でも感染症でも災害でもなんでもいいのですが、何かあったらもう一気に路上に行かざるを得ない人が、20年くらいかけて、じわじわと増やされてきているのだと思います。

小森　医療制度の崩壊だって安倍政権や東京都が進めてきたことですよね。そのことを全部、今思い起こしてその責任を取れと、私達は今度の総選挙で意思表示すると、そういうことですね。

雨宮　そうですね。